

6. 人間観

6-1 人間の分類

6-1-1 性と年齢による分類

ナー エ ペウレ na e=pewre まだおまえは若い。ルオンネ ruonne 中位の年の人と言う。ク ルオンネ ku=ruonne 私は中老だ。カニ アナクネ ナー ルオンネ プ クネル ウエ ネ ワ k=ani anakne na ruonne p ku=ne ruwe ne wa 私はまだ中老だよ。ク オンネ ku=onne 私は年をとった。シノ オンネ sino onne 非常に年をとった人と言う。

[貫気別 上田トシ氏]

6-1-2 技術と性格による分類

イソンクル isonkur とは、いろいろとイソン ison する（獲物を得る）人だ。ほんとうにイソンクル isonkur というのは、クマでもシカでも魚でも何でもよく捕れる人で、孫じいさんのイコアンレキがそういう人だったから、そんなのばかり食べさせられて私は育ちました。イソウンクル isounkur というのは、シカでもクマでもムジナでも何でもとれる「マタギ」（イラマンテクル iramantekur）のことだ。エカシは、クマでもシカでもたくさんとつても祝い事を家でするからポロチセ poro cise（大きな家）に住んでいた。

エカシは、クマの親子を3頭とってきたことがある。親子3頭を獲るなんてことはめつたにないから、村の人は、エカシをコタンコロクル kotan kor kur（村長）って、シノニシパ sino nisipa（本当の金持ち）って立てまつたらしい。すごいパウエトクコル pawetokkor（口が達者な）で、シレトクコロ siretokkor（体格がよい）で、イソンクル isounkur（獲物に恵まれた）したエカシだった。エカシは、サパウンベ sakaunpe（木幣の冠）をつけ、チカラカラベ cikarkarpe（刺繍入りの着物）を着て、カムイノミ kamuynomi（お祈り）に歩いた人だった。みんなにクユポクユポ kuyupo kuyupo（兄貴、兄貴）って言われて、何処の人からも、誰が来たって、そう言われていた。

[貫気別 黒川セツ氏]

エカシは、シャモの人との付き合いも多かったので、家も外壁は板で囲み、床にも板を敷いていたのだと思う。孫じいさんは、マタギをしていたが八田鉱山の仕事で、石炭捜しに山歩きもしていたので、シャモとの付き合いも広がった。ソギさんという人が八田鉱山の取り次ぎだった。

立派なエカシで、明治生まれなのにどこで習ったのか字が読めたし自分の名前を書けた。

[貫気別 黒川セツ氏]

1月20日過ぎに、私の祖父のイコアンレキエカシ *ikoanreki ekasi*は、一日に一軒づつ村全部の家をまわってシンヌラッパ *sinnurappa* (先祖供養)をやった。それから、山の上のヌサ *nusa* (祭壇)へ行つてハルエカムイノミ *haruekamuy nomi* (食物を供えてするお祈り)をした。ヌサ *nusa* (祭壇)はお日さんの方に向いていた。(貫6-4-5参照)

[貫気別 黒川セツ氏]

セツさんは昔の話にあるように、カムイ ハル ネ ヤクカ ユク カム ネ ヤクカ ケ シリキラッパ カ ソモ キノ カン っ て タン メノコ オルシベ ネ ワ *kamuy haru ne yakka yuk kam ne yakka k=esirikirap ka somo kino k=an* っ て *tan menoko oruspe ne wa* 「クマの肉でもシカの肉でも困ることがなく私はいたつていう、この女のひとの話なんだ。」

[貫気別 上田トシ氏]

セツさんは、サパピリカ ワ ラムシカルン *sapapirka wa ramusikarun* 「頭が良くて物覚えがよい。」

[貫気別 上田トシ氏]

シサムサニ *sisam sani*というのは、シャモの子、シャモとアイヌの混血のことをいう。悪口にシサムタイベ *sisam taype*という。(カムイサニとかイソウンクルサニという言葉は聞いたことがない—調査者の質問に答えて)

[貫気別 黒川セツ氏]

6—1—3 身分・家系による分類

私は、荷負のスケレベに生まれた。母のハナが離婚したので、4歳のとき母に連れられて、荷負から貫気別に来た。母の母(フチ *huci*)は、ウプシ *upusi* といい、黒川イコアンレキと再婚して貫気別に住んでいた。イコアンレキの家で、フチ(ウプシ)とエカシ(イコアンレキ)、それに母(ハナ)に13歳になるまで育てられた。

[貫気別 黒川セツ氏]

祖母の黒川ウプシは、木村市太郎の系統だ。何でもできる人で、作っても栄える、作ってものびる、という意味だと萱野さんに教えられた。

[貫気別 黒川セツ氏]

エカシの黒川イコアンレキには、イソノスケとカミキチという息子が二人いたのだが、二人とも樺太に仕事に行っていた。私が7~8歳のころイソノスケがなくなった。次男のカミキチも終戦後に樺太から引き揚げて帯広にいと聞いたがその後消息が知れない。

私の母方の祖母は、エカシ(イコアンレキ)の後妻であった。だから私とエカシには、血のつながりがない。姉が死んで、私が生まれ、弟が生まれたが、弟は、木幡の姓を継ぐということで、木幡の籍に入った。母親が離婚してここに戻って来ると、子供のいないエカシは、血の

つながりのない私なのに、後妻の孫だからと言うことで、黒川の籍に入れた。

[貫気別 黒川セツ氏]

エカシがルプケプ *rupkep* で開墾した土地（貫3-3-4参照）は、エカシが跡取りとして黒川の籍に入れたエカシの妹（スツタフチ）の息子の利太郎さんにやった（貫10-4-1参照）。

[貫気別 黒川セツ氏]

フチは、（荷負）本村の木村市太郎の系統だ。市太郎アチャポと松太郎おじさんの父親はいところになる。リュウノスケは、またいとかか、いところになる。今は（荷負）本村にばかり親戚がいて、貫気別には親類がいない。

[貫気別 黒川セツ氏]

貫気別のコタンコロクル *kotan kor kur*（村長）は、現在の川奈野氏で4代目になる。初代が亡くなった後、私の祖父のイコアンレキエカシ *ikoanreki ekasi* が後を継いだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

クマは、家を選んでやってくる。この家に行けばちゃんと祭ってもらえると思うから私のエカシ（*ekasi* 祖父）の家に来たのだ（エカシはクマがよく獲れたということ）。親子クマ3頭で来るといのは、エカシの人柄を見ているからだ。このような話をエカシ同士がしているのを聞いたことがある。貫気別の部落では、黒川八郎さんと私のエカシしかクマを捕らなかつた。

黒川の家系は、クマの血統である。だから、クマも自然に遊びに出てくる。「カムイサシミ エ ネ ルウエ ネ *kamuy sasimi e=ne ruwe ne*（お前はクマ神の血統だ）だからカムイコインカラ *kamuykoinkar* される（神に見守られる）」。凶作の年、イペペシナイ *ipepesnay* の奥のヌプキオンナイ *nupkionnay* にクマが出てきたことがあるそうだ。エカシか、その兄貴かがクマを矢で獲りその肉をみんなに配った。それでこの部落が生き延びたそうだ。

名寄にマタギに行つてクマに殺されたエカシの兄弟もいる。エカシの兄弟はみなマタギだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

6-1-4 親族名称

子供たちは村の大人を呼ぶとき、特に親族関係がなくても、フチ、エカシ、ハポ、アチャと呼んだ。たとえば、長野セイゾウ氏にたいしては、セツコアチャ、黒川コシに対しては、コシハポ *kosi hapo* というように呼んだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

6-2 身体部位名称

歯が痛むは、ク ニマキ アラカ *ku=nimaki arka* と言う。

[貫気別 黒川セツ氏]

ヨムテク yomtek 「全身が疲労する」。ク ヨムテク ワ ク テケヘ アルカ ku=yomtek wa ku=tekehe arka 「体が疲れて手が痛い」。

ヌトクカリ nutokkari 「めまいがする」。サンペムルセ sanpe murse 「気を失う」。

ヤイヌムウエン yaynum wen 「気分が悪い」。

ク ニマキ サウサウケ ku=nimaki sawsawke 「歯がぬけそうになる」

ケマハ アラカ kemaha arka 「足が痛い」。ケマハ アラカ パテクン ネ ヤク ウエン クス イクケウ アラカ、イクケウ アラカ コヤイウエンヌカラkemaha arka patek un ne yak wen kusu ikkew arka,ikkew arka koyaywennukar 「足が痛いだけでも悪いのに、腰が痛くてどうしようもない」

[貫気別 上田トシ氏]

6-3 人名

4歳の時までニオイ（荷負）のスケレベに住んでいたが、4歳から祖父母に育てられる。孫じいさんの黒川イコアンレキに育った（育てられた）。祖母は黒川ウブシという。孫じいさんは、シャモの名前（戸籍上の名前）で、イコアンレキと言い、アイヌ語ではマステキ masteki という。マステキという名はイソンクル isonkur でいろいろやるので、イソン ison する（狩猟をする）のでついた名らしい。明治の農地の切替の時にイコアンレキに変えたそうだ。イコアンレキという名は何でも人の先に立ってやる人だからついた名だそうだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

黒川イコアンレキは、村の一番奥（川上）に住んでいた。イコアンレキというのは、シサムレ sisam re（戸籍上の名）で、アイヌレ aynu re（正式のアイヌの名）はマステキ masteki といった。

[貫気別 黒川セツ氏]

祖父は、あだ名をナヨルン・エカシ nayorun ekasi という。貫気別の沢の支流で村の近くを流れる小川（ヌプキベツ オンナイ nupkipet onnay）に住んでいたのでついたあだ名で、「沢に住むエカシ」という意味だ。エカシは、ナヨルンエカシ nayorun ekasi と呼ばれ、名前で呼ばれることはなかった。

[貫気別 黒川セツ氏]

6-4 身体の世界

6-4-3 病気と治療

昔、エカシがカムイノミ kamuynomi（祈る）して温泉水を患部につけて、妹のガンベたかり（カサになるできもの）（チマウシ cimausi 上田トシ氏）を治した。カムイ ワクカクコロ ワ ケク kamuy wakka ku=kor wa k=ek 「神の水を私が持ってきた」のだから、飲

めと言われて飲まされたこともある。飲むと腹の中の悪いものを出してくれるという。水虫(ケマハ ポップルセ kemaha popporse)にも効く。(ポップルセ ワ クキキ コロ ペーヘ チク パクノ クキキ popporse wa ku=kiki kor pehe cik pakno ku=kiki「水虫になって、搔いて、汁がしたたるほど私は搔いた」という。マヤイケ クス クキキ アイネ ペーヘ チク パクノ クキキ クス カムイ ワクカ タ クス アルパ ヒネ ナン コロ mayayke kusu ku=kiki(ya)aine pehe cik pakno ku=kiki kusu kamuy wakka ta ku=su arpa hine nan kor.「かゆくて搔いていたら、汁が滴るほど搔いた」「だから神の水を汲みにここに来たのですよ」という。上田トシ氏)

金があればここに温泉作るのにと考えた。昔、ポンチセ pon cise (仮小屋)をこしらえてそこで治療していた。エカシはそれを覚えていて、私たちを温泉に連れて行った。

仮小屋に野宿して、水汲んで風呂こしらえて、ヤイカフウエ yaykahuwe ~yaykahuye (自己看護する)して治った人がいる。

[貫気別 黒川セツ氏]

ヤイカフイエ yaykahuye とは、ヤイカ タ ヤイフライエ ワ アン アイネ トテク ワ ホシビ yayka ta yayhuraye wa an aine tótek wa hosipi「自分の体に(温泉を)かけていて、治って帰った」つていうことでしょう。

フチ カシ ク フイエ húci kasi ku=huye「フチに付き添ってやる」。イカフイエ ikahuye「看病する」でもいい。エンカヤイフイエ enkayayhuye「気の毒に思っ見てもらった」。エンカフイエ enkahuye ともいう。遊びに来て休んでいる時には、エンカシネウエ enkosinewe という。

[貫気別 上田トシ氏]

「治る」ことを ピリカノ トーテク pirkano tótek という。ク ケマハ ポップルセ アコルカ タネ アナクネ ポップルセ アイエ ピリカノ トーテク ワ ピリカ ワー ku=kemaha popporse a korka.tane anakne popporse aye hi ka pirkano tótek wa pirka wa.「私の足が水虫になったけれど、今はもう水虫になった所も治ってよくなった。

「まだ痛い」 ナー アラカ na arka

[貫気別 上田トシ氏]

昭和21年、発疹チブスでたくさんの人が死んだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

6—4—4 水浴び・風呂

沢のそばに住んでいたから、冬でも夏でも朝起きたら、毎日家の近くの沢の水で顔を洗った。沢に降りて、水汲み場で、手で水をすくっては、陸(おか)の方に顔を向けて洗う。川の上の方を見たり、下の方を見たりすると、ちゃんと神様が守ってくれて、頭良くなって器量良くなってすばらしい女になるってエカシから言われた。子供だからおだててやれば、冷たいのもわ

からないで行くと思っただけらしい。どんな寒中でも沢に顔洗いに行った。帰って来ると家の中で笑いながらアイヌイタク *aynu itak* (アイヌ語) で、エカシに エウオンネ ワ エク *ewonne wa ek?*」と尋ねられた。「顔を洗ってきたの」という意味だと思う。私は、家の中で顔を洗ったことがない。

[貫気別 黒川セツ氏]

エカシは、風呂も作ってくれた。大木のウロ (空洞) になったものを適当な高さに切り、底に鉄板を張って風呂桶とした。

[貫気別 黒川セツ氏]

6-4-5 お守り・まじない

子供の頃、体が弱かったので、自分をエプンキネ *epunkine* (守る) するために、チセコロカムイ *cisekor kamuy* (家の守り神) と同じ形のエプンキネ カムイ *epunkine kamuy* を作り、チセコロカムイの右側に立てた。病気になるたびにイナウキケ *inawkike* (削りかけ) を一本ずつつける。その際、チセコロカムイ *cise kor kamuy* (家の守り神) にもイナウキケ (削りかけ) を付ける。(貫6-4-9参照)

ハシカの時、死にかけてから、この守り神を作ってくれた。そして、これからも守ってくれるようにと、その後、ずっと立てたままにして置いた。ハシカで死にそうになった時は、血便が出るひどい状態で、もうだめではないか、と言われるような状態だった。それ以後も、フキの根を取って、煎じて私に飲ませる時、この守り神にカムイノミ *kamuynomi* (お祈り) してから飲ませてくれるようになった。

[貫気別 黒川セツ氏]

木の葉が落ちるとユブケエポタラ *yupke epotara* (非常に心配する?) から、どんなまじないでも、うんと体の弱い人への病気治療のまじないでも、ホプニレ *hopunire* (送り儀礼) でも、木の葉が落ちてからでは効き目がない。だから、木の葉が落ちる前にホプニレ *hopunire* (送り儀礼) した。10月頃だ。木の葉が落ちる前に「納めるものは納め (送り儀礼し)」、おはらいするものはおはらいをすませる。木の葉が落ちてからではカムイノミ *kamuynomi* (お祈り) しても通じないのだそうだ。

[貫木別 黒川セツ氏]

ハルエカムイノミ *haruekamuy nomi* (食物を供えてするお祈り) は、いつでもいい。流行 (はやり) 病の病気の神が村に来ないように、村の一軒ずつからアワカヒエをひとつかみずつ集めて、村全体でやったものだ。風邪、発疹チフスのような流行病のカムイ アプカシ *kamuy apkas* (神様が歩き回る) するとやった。パコロ カムイ アプカシ ハウエ ネ クス *pákor kamuy apkas hawe ne kusu* (流行病の神が歩き回るという話だから)、そういうパハウ アシ ナ *pahaw as na* (うわさが立ったよ) と言って、すぐにハルエカムイノミをやった。フチアペ *húciape* (火の神) にイチャルパ *icarpa* (食物をまく) する。イコアンレキエカシ *ikoanreki ekasi* (黒川氏の祖父) が、15軒の村全体を代表してやった。1月に入ると、パコロ

カムイ ア ノミ pa kor kamuy a=nomi (流行病の神を我々は祭る) と言つて、イペペシナイ ipepesnay 対岸の丘のエサンピラ esanpira の上にヌサ nusa (祭壇) を作つてハルエカムイノミをした。このヌサ nusa (祭壇) は、病気の神様が来ないように祈るために作ったヌサだ。雪の深い頃にそこまで行った記憶がある。ヌサコロカムイ nusa kor kamuy (祭壇を守る神) のイナウ inaw (御幣) も立ててあり、チェホロカケプ cehorkakep (逆さ削りのイナウ) が10本くらい並んでいたのを見た。毎年、カムイノミ kamuynomi (お祈り) をするためにチェホロカケプを持って行くが、エカシ ekasi (祖父) が亡くなって、2、3年の間は、やっていなかったが、昭和24、5年頃、このヌサは無くなった。

[貫気別 黒川セツ氏]

6-4-7 呪術

トウス tusu は「拝む」ことで、ウウエインカラ uweinkar (占い) とは違うものだ。ウウエインカルができて、トウスができるとは限らない。また、トウスができてウウエインカラできない人もある。貫気別には今でもトウス tusu する人がいるが、ウウエインカラはできない。

[貫気別 黒川セツ氏]

6-4-8 夢と占い

占いすることを、ウウエインカラ uweinkar という。トウス tusu とは違うものだ。

夢、星、キツネの鳴き声で、人の死がわかる。二風谷、振内までくらいの範囲であれば、人の死が、星を見ていてわかる。体をさわっただけで、悪いところもわかる。腰が痛い、という人をさわっても、脊髄が悪いとか、ここに仏さん背負っているんだ、などと口が勝手に動く。

荷負本村、上貫気別、メム、二風谷のそれぞれの方面で、真つ赤な星が見えるとそこで人が死ぬというしるしだ。2つの星がぶつかつたり、離れたりしていると、交通事故が起きるしるし。予知しようと思つて星をにらんでいるわけではない。ふと見るのだ。1週間か10日前にわかる。

夢を見てわかるというのは、ある家に何か問題が起こるような夢を見る。すると、誰かが来て、その家の人が事故に遭つたと知らせるといふようなことが起こる。今でも、子供達も、自分が見た夢について尋ねて来る。仏さんについてのことであれば、仏壇に流し、供養しなさいと教える。これは龍神さんが原因だから、こうこうしなさい、などと教えてやる。ウバシクマ upaskuma (伝説) でもウウエペケレ uwepeker (昔話) でも、聞いているので、こうこうしなさい、と教えてあげることができるのだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

キツネは、吠え方で、人が急に死ぬとか、火事、事故などを教えて (エピリマ epirma) くれる。これは、火の神様を通して、キツネが教えてくれているのだ。つぎの3種の鳴き方がある。

る。わんわん鳴く、ワーとふしをつけてのぼして鳴く、ワンワンと短く切って吠える。

私は、キツネの鳴き方で、何のしるしかわかる。今でも、キツネの鳴き声を聞いた人が、私に、何の意味かを聞きに来る。私は鳴き声から判断して、外で火を燃やし、火の前で祈る。龍神さん以外は、煙草が好きなので、外で火を焚いて、煙草をくべてキツネの神に祈る。(貫7-4-1参照)

[貫気別 黒川セツ氏]

6—4—9 守り神

孫じいさん(黒川イコアンレキ)は、私は、女の子だけども、オクカヨ ラマツ コル okkayo ramat kor「男の心を持っている」と言って、私にエプンキネ カムイ epunkine kamuy(守り神の太い丸太の木幣)を作ってくれて、酒を飲むときには、エプンキネカムイの所に連れて行って、そこに座らせて、お祈りした後、そのパケセpakese(酒の飲み残し)を私にくれて、酒を奉酒箸で肩に振りまいた。どんなことにも負けないようにと神様にお願いしてあるからと言っていた。(貫6-4-5参照)

エプンキネカムイは、ドスナラを切って、イナウ inaw(木幣—削りかけのことらしい:編集者注)をいっぱいつけてある。普通のチホロカケプ cehorkakep(逆さ削りの木幣)というのは、ポンと立てて、終わったら焼くけれど、エプンキネカムイは、お祈りする度にイナウケ inawkeしてイナウを頭部につけるからイナウでフサフサになる。(貫7-4-2参照)

[貫気別 黒川セツ氏]

私の甥にあたる吉郎おとは、チェホロカケプ cehorkakep(逆さ削りの御幣)を守り神として私にこしらえてくれた。

[貫気別 黒川セツ氏]

6—5 人の一生

6—5—3 育児と教育

4歳の時までニオイ(荷負)のスケレベに住んでいたが、4歳から祖父母に育てられる。孫じいさんの黒川イコアンレキに育った(育てられた)。

子守りをしなければならなかったので、学校も小学校3年の1学期までしか行かなかった。

孫じいさんは、私が13歳の時に亡くなった。20歳頃まで生きていてくれたならもっとたくさん聞けたのと思う。

エカシとフチに育ったから、エカシが3頭の親子クマを獲ってクマ送りしたの見たり聞いた(貫2-3参照)、シカ獲ってシカの送り、キツネ獲ってキツネ送り、そういう風なことは、小さい小さい時からずうっと見て聞いていた。だから、アイヌ語こそ覚えなかったけれど、アイヌブリ aynupuri(アイヌ式の習俗)は何でも知っています。

[貫気別 黒川セツ氏]

13歳になってからは、西島テル氏の実家に雇い奉公に行った。西島氏の家は店をやっていて、畑も作っていた。16、7歳までそこにいた。

[貫気別 黒川セツ氏]

よそのエカシらは、女にレブニrepni（ユーカラを演じるときの拍子木）を運ばせたり、ユーカラを大人に混じって夜遅くまで聞かせるものではないというが、それでもエカシは、この子は、エプキネカムイ epunkinekamuy（守り神）に頼んでオクカヨ ラマツ コル okkayo ramat kor（男の精神を持っている）している（貫6-4-9参照）からとやらせてくれた。自分にもレブ rep（拍子木を持つ）させてくれた。

[貫気別 黒川セツ氏]

年頃になると、シャモの家からたくさん私をもらいに来るのに、うちのフチは、シャモは絶対駄目だと反対した。聞くと、自分はシャモの子で父親が内地から来ていたが、内地に妻も子もいるからと帰っちゃった。シャモは薄情だから自分の血統はやりたくないと思ったようだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

エカシ ékasi（イコアンレキ）は、「これからはアイヌ語を知らなくてもいいから、日本語を勉強しなさい」と言っけて筆と硯を買ってくれた。一から十までと、名前が書けるようになってから小学校に入学した。入学式にはエシカもついて来た。エシカは、入学式で先生からタプカラ tapkar するように言われて、教壇でサパウンベ sapaunpe（木幣の冠）をつけてタプカラ tapkar（男の踊り）をやった。学校が始ってから和人の子供たちが「イコアン、イコアン」と囃すので、「学校に行きたくない」と言うと、エカシは「そんなことでくじけるな」と言った。昔はアイヌはひどく軽蔑されて、そのためアイヌで小学校を卒業した人はほとんどいなかった。私も3年しか行かなかった。

[貫気別 黒川セツ氏]

シサムコピリカ sisamkopirka「日本人とうまくやる」、トノコピリカ tonokopirka「日本人とうまくやる」。これらは、エカシ ekasi（祖父）から、日本語を勉強しろ、と言われた時に、エカシが言った言葉だ。

[貫気別 黒川セツ氏]

6—5—6 葬礼と先祖供養

ケマパセ kemapase（足が重くなる、「年をとる」）すると、猟のための山歩きもできなくなる。そうやって、死が近いことに気づく人もある。

[貫気別 黒川セツ氏]

貫気別の人達が昔住んでいたピリケポンナイ フシココタン pirkep onnay husko kotanの高台には昔の墓が残っていた。墓を昭和28～9年に川向いの町の方に移転した。昔は、死人を土葬にした。その土葬になっているのを全部掘り起こして火葬にした。墓標も一緒に焼いた。そ

の時に見た女の墓標（クワ kuwa）は丸型でまん中に孔が空いていた。男の墓標は、先がとんがっている。墓標は、堅く丈夫で長持ち、腐らないので、ドスナラ（punkaw）で作った。うちのエカシの墓標も、何も腐っていなかった。ドスナラは、腐らない木だからイヌンペ inunpe（炉縁木）にも使う。

[貫気別 黒川セツ氏]

6—5—7 死生観

30歳の頃だと思うが、ある所のクマ送りに行ったときに、そのコタンの人は、私を誰だか知らないものだから、みんなから カマカマ イサプテ kámakáma isapte（酒の入ったトゥキ tuki（杯）が頭を通過する）された。カマカマ イメク kámakáma imek（差別する）されてもらえない。カムイ ハル kamuy haru（クマの肉）少しでももらえたらなあと思った。フチ húci（祖母）やら エカシ ekasi（祖父）やらも一緒に私について来ていると思うから、誰か私にトゥキ tuki くれれば、フチ アペ húci ape（火の神）にカムイノミ kamuynomi（お祈り）しようと思っていたのに、トゥキ tuki（盃）でも団子でも私の頭の上を通過して行く（イサプテ isapte）。

どうしてカムイハル（クマの肉）もくれないのかと思ったかと言うと、シンヌラッパ sinnurappa（先祖供養）でもカムイホブニレ kamuyhopunire（クマ送り）でも、酒や食べ物をイサプテ isapte（食べ物を渡す）してもらえなかったら、先祖もイコイトウバ ikoytupa（欲しがる）して軒下で泣いているということをエカシやフチから聞いていたので、イサプテしてもらいたいなあと思っただけだ。

[貫気別 黒川セツ氏]

シンリッ エプンキネ sinrit epunkine（先祖が見守る）しているので、私は丈夫に暮らしているのだと思う。

[貫気別 黒川セツ氏]

この世を苦しめた人は、あの世に行ってもいい人にはなれない。

[貫気別 黒川セツ氏]

6—6 人間の動作・仕草

「立て膝座り」 ク メフントキキ ku=mehuntokiki（行儀の悪い座り方だと注意される）
テーエタ ルプネ マツ アナクネ メフントキキ ワ パテク ロク ア ワ アン ル
ウエ ク ヌカルペ ア ワ te'eta rupne mat anakne mehuntokiki wa patek rok a wa an
ruwe ku=nukar pe ne a wa 「昔の老婆は立て膝でばかり座っていたのを私は見たものでしたよ。」

「立て膝座り」 ク コクカエア ku=kokka'e'a

カニ アナクネ コクカエア パテク ネ カ ソモ キ コルカ コクカエア アナク ク
キプ ネ k=ani anakne kokka'e'a patek ne k=a somo ki korka kokka'e'a
anak(kuki)ku=kip ne 「私は立て膝ばかりはしなかったが、したことはある。」

「片膝立て座り」 オアラ ク コクカエア oar ku=kokka'e'a
オアラ ク コクカエア ネ ヤ クキ コル カン ネ ワ o'ar ku=kokka'e'a ne ya
ku=ki kor k=an ne wa 「立て膝座りもしていたよ。」

「横座り」 ク ホウムサモマレ ku=houmsamomare (行儀の悪い座り方だと注意される)
タップ ネノ モノア アン アナクネ ホウンサム オマレ tap neno mono'a=an anakne
hounsam omare 「こう座るのはホウンサモマレ」

カン アナクネ ク ホウンサム オマレ ワ パテク カ ワ カン ク キプ ネ オ
ラー セコロ k=an anakne ku=hounsam omare wa patek k=a wa k=an ku=kip ne ora
sekor mono'a=an anakne kokkoa'e'a 「私は横座りばかりして座っていた。そうしていたも
ので、それから、このように座るのは立て膝だ。」

「正座する」 モノア mono'a
「あぐらをかき」 エ チャチャケマ ワ エア エ アン e=cacakema wa e=a wa e=an
「足を伸ばして座る」 ケマトウリ ワ ア ワ アン kematuri wa a wa an (行儀の悪
い座り方だと注意される)

「行儀が悪い」 アエクリアンテ ナー a=e=kurianta na

[貫気別 上田トシ氏]

6—8 交易・通婚・戦争

6—8—1 交易

食べ物、プクサ pukusa (ギョウジャニンニク) を取ったって、フキ採ったっていい。ヒエ
とかアワとかも自分で作れるが、味付けにする油とか塩とかは自分では作れない。浜まで行って
海の水をとって塩までも作って来たが、コンブとかイワシ油とかは、本当に貴重なものだった。
エカシが塩作りに浜まで行ったのを覚えている。コンブも浜まで泊まりがけで採りに行った。

[貫気別 黒川セツ氏]

オビチ・エカシ (貫10-4-1参照) は、漁師の所で働いて、賃金にキンキラキンに光った石油
ガンガン一つもらって帰ってきたという。シロカニトウキ コンカニトウキ sirokani tuki
konkani tuki 「銀の杯、金の杯」って言葉があっただけで、俺はこんなにキラキラ光る物を
もらったのだから大きな手柄になった、大金持ちになったと思って背負って帰ってきたという。
みんなに見せると、石油の入ったガンガンだ。一年も二年も雇いしてこんなもの一つだけもら
って帰って来るなんてみんなに怒られたと言う。

[貫気別 黒川セツ氏]